法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-23

〈書評と紹介〉外山徹著　『武州高尾山の歴史と信仰』

玉井, ゆかり / TAMAI, Yukari

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
78
(開始ページ / Start Page)
94
(終了ページ / End Page)
98
(発行年 / Year)
2012-09-30

Hosei University Repository

外山徹　著
『武州高尾山の歴史と信仰』

玉井　ゆかり

高尾山は東京都八王子市にある標高約六百メートルの山である。都心から西へ約五十キロメートル、電車で一時間、多くのハイカーが訪れる高尾山は、近年、著名な旅行ガイドブックに取り上げられたことが人気に拍車をかけ、登山者数が日本一になったというニュースは記憶に新しい。このように行楽地としても広く知られる高尾山であるが、その山中にある高尾山薬王院有喜寺は千二百年前に開山されたという歴史を誇る寺院であり、近世以来現代に至るまで、多くの参詣者を集めてきた信仰の山である。

高尾山薬王院には多くの古文書が伝来していることは江戸時代から知られていた[1]。その全体的な概要が初めて把握されたのは昭和三十五年度に東京都教育委員会によって実施された「浅川流域文化財総合調査」で、近世文書二千点あまりの存在が明らかとなった。その後二十六年を経て、法政大学の多摩キャンパスが開設された機会に、地域社会と大学の連携を図り多摩の地域文化の発展に寄与するという目的の下に薬王院文書調査事業が具体化し、高尾山薬王院文書調査団が組織された（団長村上直氏）。そこで近世を中心とした二五七三点の古文書について、昭和六十一年度から六か年に及ぶ調査・分類・史料集の刊行が行われたのである。さらに平成十年度から実施された東京都教育委員会による調査で、新たに近代文書を中心とする一七六六点が確認されており、現在までに四千三百点以上の古文書の伝来が明らかになっていることが本書に記されている。

さて、本書の著者外山徹氏は、高尾山史に長年取り組んでこられた研究者である。本書にも記されているように、法政大学による史料集刊行が開始された頃から研究に取り組み始めたということであるから、高尾山との関わりは二十年以上に及ぶという点にまず敬服した。本書からは、蓄積された研究成果とともに、氏の高尾山史研究に対する静かな内にも熱い学究的な情熱を感じさせられる。それをここで巧みに表現する力量を、残念ながら筆者はもちあわせていないが、ご叱正を覚悟のうえ、ご労作の一端なりとも紹介させていただきたいと思い筆を執った。なお、本書では、自然地形としての高尾山と区別する意味で、薬王院の山号である「高尾山」を使われているので、筆者も準拠させていただいた。

まず、本書の目次を記して構成を示し、次にその内容について概要を紹介したい。ただ、紙幅にかぎりがあるので、ごく簡略な紹介にとどめなくてはならないことをおことわりしておきたい。

序　―高尾山研究へのアプローチ―
第一章　古代・中世から近世初頭の高尾山
一　「高尾山縁起」に記された時代
　　行基による開基伝承／醍醐寺俊源の来山／飯縄大権現

Hosei University Repository

の感得／法流の継承と飯縄信仰に対する認識
二　中興伝承の頃の高尾山周辺
三　戦国期の高尾山
北条氏康による薬師堂修復料寄進／北条氏照と高尾山
四　近世初頭の高尾山
徳川氏の関東入府と高尾山／寛永の高尾山再興
第二章　高尾山信仰の展開
一　高尾山信仰の概観
戦国期から江戸前期／享保期における活性化／宝暦・天明期における寺勢の興隆
二　高尾山の祭祀
薬師如来／飯縄大権現／弘法大師
三　人々が求めた現世利益
護符に見えるさまざまな利益／病気平癒／蚕守護
四　高尾山と富士信仰
富士山の遙拝所／戦国期の富士浅間勧請／富士講と高尾山
第三章　高尾山信仰圏の構造
一　高尾山信仰圏の形成
高尾山周辺の交通路／信仰圏構造の想定
二　周辺地域における高尾山信仰
麓村々／八王子宿
三　関東西部・甲斐国東部への信仰圏の広がり
信仰圏の延伸／江戸田舎日護摩講中／日護摩講中に見る檀家の分布／護摩札取次の実相／取次者の数的分布
第四章　護摩札配札と信仰圏の拡張
一　高尾山の護摩札配札
文化六年「江戸田舎日護摩講中元帳」／取次が支えた配札活動
二　護摩札配札の実態
高尾山周辺／川越・中山道筋／甲斐国郡内地方／江戸／相模国北部
第五章　講活動と開帳
一　講活動
江戸田舎日護摩講中／江戸の講中／個々の人間関係から「地縁」へ／農村の代参講／その他の講
二　高尾山信仰を支えた人々
講元・取次宿／民間宗教者／先達／御師の不在
三　高尾山の開帳
居開帳／江戸中期における活発な居開帳／江戸出開帳／出開帳の現実／明治期の東京出開帳
第六章　名所としての高尾山像の形成
一　参詣者を迎える諸施設
高尾山の諸堂宇／鳥居の建立／唐銅五重塔／宿坊／薬王院における食事事情／茶屋
二　山内名所
高尾十勝／山上の名所／表参道沿いの名所／琵琶滝川付近の名所／琵琶滝／蛇滝の開発

Hosei University Repository

第七章　高尾山と巨大都市江戸
一　支配体制への対応
寺院法度による取締／寺院本末制度と高尾山／中本寺と末寺・門徒
二　徳川将軍家との儀礼
将軍からの寺領の下附／寺領朱印状改め／将軍への拝謁と寺院の序列／年頭御礼／将軍の代替御礼／江戸城登城
三　江戸における高尾山信仰
江戸における布教活動／薬王院の江戸出府
四　武家による信仰
上杉謙信と高尾山／紀伊徳川家における放生会奉納／代々紀州家当主の帰依／紀州家祈祷所廃止と再興／尾張徳川家／護摩檀中の諸大名／旗本クラスの護摩檀家
第八章　経済基盤と経営
一　高尾山の経済基盤
後北条氏による寺領寄進／徳川幕府による寺領安堵／朱印地以外の所持地
二　薬王院の寺院経営
寺務を担った人々／地中百姓／近隣の村々が担った役割
第九章　近代への展望
一　神仏分離と高尾山
明治新政府の神仏分離令／廃仏毀釈の嵐／寺院としての存続
二　近代の高尾山信仰
明治初期の高尾山信仰／信仰活動の低調／明治中期の高尾山信仰
参考文献
おわりに

「序」の冒頭において著者は、「一連の研究が目指す遠いところにある目標は、社会において宗教が果たしている役割の解明である」と述べている。そして本書について、「主に江戸時代の後期を時期的な対象とし、宗教活動という非常に多岐にわたる営為の中でも、社寺参詣というジャンルについて、主に寺社側の動向から分析を試みよう」とするものであるとしている。

このことを念頭に置いて各章を概観してみよう。

第一章は行基による開基伝承の時代（天平十六年）から書き起こされているが、薬王院文書の中には一次史料となるものは一五〇〇年代後半を待たないと残存していない。そこで、寛延年間の年次を持つ「縁起」を検討しながら近世初頭、寛永期の再興時までの高尾山通史の構築を試みられている。戦国期の高尾山は後北条氏と関係が深く、北条氏照による寺領の寄進は有名である。しかし後北条滅亡後の高尾山は最も困難な時代に突入し、寛永期の堂宇再建、寺勢の復興の時期までは高尾山史も霧の中に隠れてしまうという。

第二章では史料が残存するようになる戦国期以降の高尾山の信

Hosei University Repository

仰について、薬王院文書や山麓の石川家の日記といった史料、さらには信者に配られた護符などを手がかりにして、祭祀される神仏やさまざまな利益から読み解いている。ここで筆者が非常に興味深く思ったのは、薬王院の本尊が薬師如来（本尊と明記していなくても、行基の開創伝承では薬師如来を祀ったとある）から飯縄大権現へと変わる経緯である。いや、経緯は明確にわからないが、近世初めには飯縄大権現が信仰の中心に据えられたという史料からの解明である。飯縄信仰については筆者は知識不足であるが、薬王院が戦国末期から近世初頭にかけて寺勢衰退し、寛永期頃に復興を果たすことと飯縄信仰との関連性についてはさらに深く知りたいところである。

第三章と第四章では高尾山の信仰圏の形成やその構造、さらに関東一円への信仰圏の拡大について、薬王院文書、特に「江戸田舎日護摩講中元帳」といった史料から解明を試みられている。

高尾山に限らず、護摩札や種々の護符を信者に配布し、それによって信仰圏を広げていく寺社は数多くあった。関東地方でも相模大山、武蔵御嶽山などの配札については先行研究も多くなされているが、配布の役を担うのは主に「御師」と呼ばれる宗教者である場合が多かった。ところが高尾山では「御師」の存在は確認できないにもかかわらず、定期的な護摩札の配札が行われていたのである。ではどのようになされていたのか、ということが、第四章から第五章で解明されていく。

ここがまさに高尾山の信仰圏形成とその拡大、維持を構造的に考えた際の最も大きな特徴といえるのではないかと思う。そしてこれは、戦国期から近世初頭における高尾山の歴史とも関わってくるのであるが、この信仰圏の問題は本書の前半における重要な部分であるから、具体的な内容は本書にまかせたいと思う。

第五章では前述の護摩札配札と講活動の関わりに加え、「開帳」について実施主体＝高尾山側からの史料による分析が行われている。

第六章は高尾山内に参詣者向けの施設や、所謂「名所」と呼ばれるような場所が整備されていく動静について、薬王院文書からいくつか例をあげて述べられている。

第七章では高尾山にとって江戸という大都会がどのような意味を持っていたのかさまざまな角度から考察されている。江戸の抱える庶民の人口は周辺の寺社にとって重要な経済基盤でもあり、寺社参詣の隆盛を支える存在であった。しかし一方では、どんなに信仰を得ようとも寺社は徳川幕府の支配政策に組み込まれた存在であった。ここでは、薬王院文書の中の幕府の寺社支配に関わる史料により、寺社参詣と政治支配との関わりを検証されている。

第八章では高尾山の経済基盤と経営について、土地（寺領）と、寺務を担った人々という二つの側面から解明を試みられている。

このように、本書では江戸期までの高尾山史についてさまざまな角度での解明がなされてきたが、最後の第九章において、近代への展望として明治中期までの動向を取り上げている。明治初期の神仏分離政策は、宗教界のみならず各方面に多大な影響を与えたが、高尾山では寺院として存続する道を選択した。このときの史料も紹介されているが、筆者の個人的な関心としては、この間

Hosei University Repository

の事情についてもう少し知りたいという感想を持った。

以上、本書の構成と概略を述べてきた。筆者の知識と理解の不足から正確に伝わらないところがあるかと思うが、著者のご寛恕を請う次第である。

本書では薬王院文書を中心とした史料の分析により、寺社側の視点から総合的な高尾山信仰史の提示を試みられている。多くの史料が残っているとはいえ、長い年月の間にうけた火災などにより、本書中にも「日次記的な記録類はほとんど残っていないために、通史的な記述を困難にしている」と書かれている状況である。

しかし、そのような制約下においても地道な史料の分析から高尾山史を解明しようとされている姿勢は本書に通底しているものであり、筆者は敬服するばかりである。今後は信仰主体となった人々の側からの視点を加えた、さらに深化と広がりを持つ高尾山信仰史が提示されることと思う。

最後に世俗的な感想を述べさせていただけば、本書を通読した後、ぜひとも高尾山を訪ねたくなった。そのときは薬王院の諸堂を巡り旧跡を見学して、さらに、今は途絶えた過去の名所にも足を伸ばしてみたいと思う。

註（1）　村上直「高尾山薬王院文書について」（『近世高尾山史の研究』名著出版　一九九八年）一七頁～二七頁

（二〇一一年十一月刊　A5判　二一二頁　定価五千円＋税　同成社）